



巻 頭 言

蒲生 秀也*

第二次大戦後はじめて日本で開催された国際光学委員会 (ICO) の 1964 年の会議の準備について、また来年札幌で開催される ICO 総会について述べたい。

ICO のアメリカ代表で American Optical Co. にいた Dr. W. Lewis Hyde は、ICO 日本代表の久保田広教授と連絡をとりながら、ICO 会議の計画をしていた。未だ日本の会議の主題がきまっていない頃に、アメリカ光学会 (OSA) の 1961 年春のピッツバークの集会で、Optics in Japan というシンポジウムを計画した。当時 IBM の研究所にいた私に、日本の ICO 委員と連絡して、日本の光学の特色がどこにあるかをシンポジウムで話をするように依頼をうけた。東大生研の久保田教授、教育大光学研、京大、阪大等の研究者達と文通し、アメリカ滞在中の方達と電話によって意見を交換し、特色のある研究テーマを photographic optics と spectroscopic optics との二つの分野に分けて紹介することにした。

OSA のシンポジウムでは、日本に滞在したことのある当時オハイオ州立大学の Professor Robert A. Oetjen が司会で、日本光学社長の長岡正男さんが日本の光学工業の現状について話し、配布した資料にそって私が日本の光学研究の話をした*1。会場は満員だった。1964 年 ICO Conference on Photographic and Spectroscopic Optics の準備のために、このような会合がアメリカでもたれたことを知っている人達は少なくなっている。

OSA シンポジウムのあと、夕食をとりながら長岡さんから、第二次大戦中にドイツからの光学ガラスの輸入が途絶し、光学ガラスの国産をめざして実験室に泊り込んで頑張ったこと、その成果は戦後になってレンズ設計やカメラ産業の発展に役立ったことをうかがったのが忘れられない。

1964 年の ICO 会議から 20 年、日本のカメラ産業は世界市場を風靡し、made-in-Japan は恐るべきものとなった。写真光学と分光学だけでなく、半導体レーザーとその応用、光ファイバー、レーザー・ガラス、微小光学、電子写真、画像工学、ディスプレイ、高品質テレビジョン、カラー・フィルム等の進歩で、日本の光産業は世界のリーダーとなっている。

日本の光学の実力は、個別的に高く買われているが、世界中の光学研究者一般からみた日本のイメージは、必ずしもすっきりしていない。たとえば、日本には光学専門の英文雑誌がなく、JJAP や JJAP Letters を利用する光学研究者は少ない。昨年サマーセミナーで会った若手の研究者達は、欧米各国のジャーナルに投稿することを考えて、JJAP の光学関係のサーキュレーションを育てようとする人はほとんどみあたらなかった。JJAP の編集委員が、光学のよい論文を招待することを考えていただきたい。

来年夏の ICO 総会は、日本の光学のイメージ・アップには絶好のチャンスである。主要な研究成果を招待講演にするだけでなく、研究成果の性質や講演者の好みに合わせて、ポスター・セッションを利用するのが有効だろう。大講堂での質疑応答は効果的にゆかないことが多い。的はずれの発言に時間をとり、すぐれた議論が時間ぎれで割愛され、後で質問者を見失ってしまうなど。ことに、語学のハンディキャップのために、深刻な状況になることも時折みかける。それに比較してポスター・ペーパーでは、デモンストレーションをしたり、個人的に突込んだ議論ができるから、国際交流に適している*2。ポスター・セッションで出た重要な意見を署名入りで書いてもらって、proceeding の論文のあとに discussion として記録するのは、有益なところみであろう。

* University of California, Electrical Engineering, Irvine, California 92717, USA

*1 J. Opt. Soc. Am., 51 (1961) 485.

*2 石原 聰: 1982 年米国光学学会年会に出席して, O plus E, 1 月号 (1983) 151.